

感染制御部

Department of Infection Control and Prevention

感染制御部長
一山 智



感染症に関わるすべてを担う エキスパート集団

我が国において数少ない、感染制御と診療を統合的に担う部門である。感染症専門医師(ICD)が感染対策看護師(ICN)、臨床検査技師、薬剤師等と協力しながら、①感染症診療支援・介入(感染症診療の適正化、新興感染症・耐性菌感染症への対応)と、②医療施設感染対策(感染サーベイランス、感染防止対策の推進とアウトブレイク対策、血液・体液曝露事故対策、各種ワクチン接種、職員教育啓発活動、感染対策マニュアル作成・改訂、感染性医療廃棄物処理)に取り組んでおり、そのために必要なさまざまな方策を作成しつつ、それらを多角的、包括的かつ統合的に遂行している。

代表的診療対象疾患

- I. 血流感染・菌血症(院内の血液培養陽性の全症例)、耐性菌感染症
- II. 臓器移植や免疫抑制治療に関連した日和見感染症(真菌感染症、結核、ウイルス感染症を含む)
- III. 難治性感染症(各科からのコンサルテーションや細菌検査結果に基づく)他、重篤かつ特別な対応が必要な感染症

業務内容の特徴と実績

感染症の診断・治療・予防のすべてが対象

感染制御部は2002年10月に設立され、病院内で発生する危険性のあるすべての感染症を対象として対策業務を行っている。スタッフは感染症専門医師(ICD)、感染対策看護師(ICN)、臨床検査技師、薬剤師および事務職員から構成される。基本業務は、感染症診療支援・介入と医療施設感染対策である。

①感染症診療支援と介入

感染症診療の適正化を図り、耐性菌感染や医療コストを抑制しつつ予後を最大限に改善させることを目的とし、設立時よりシステムとして院内に定着させている。各診療科からのコンサルテーション例、重篤な感染症(検査部細菌検査室との連携による血液培養陽性、耐性菌や特殊な微生物の検出など)や、難治性感染症(薬剤部からの抗菌薬使用情報に基づく)に迅速に対応し、年間1,000例を超える症例にかか

わっている。血液培養件数・2セット採取率は顕著に上昇し、黄色ブドウ球菌菌血症症例の予後は明らかに改善しており、適正な感染症診療、および感染対策が統合的に推進された成果と考えられる。

②医療施設感染対策

感染アウトブレイクの発見と対応、職員衛生管理(針刺し等血液・体液曝露への対応や必要なワクチン接種など)、感染サーベイランス、教育など多岐にわたる。MRSAや多剤耐性緑膿菌などの耐性菌検出時の警告・指導と院内伝播の検証を行っており、接触予防策の意識向上とアウトブレイクの抑止に効果を上げている。

高度先進医療の取り組み

免疫抑制患者の感染症の早期診断・治療をめざして

京大病院の推進する最先端の高度先進医療においては、感染症の制御が最優先課題となる。そのために、臨床各科と密接な関係を保ち、特に臓器移植をはじめとする免疫抑制患者の感染症に対しては病棟回診、カンファレンス、移植マニュアル作成等にも参加し、感染症の早期診断・治療に取り組んでいる。

また、感染症に関する臨床研究の主要なテーマとして、

- ①移植後の感染症サーベイランスと防止対策、
- ②免疫不全患者における種々の日和見感染症の診断と予防、
- ③耐性菌のアクティブサーベイランス(多剤耐性緑膿菌、バンコマイシン耐性腸球菌、MRSA、ESBL産生腸内細菌など)、
- ④薬剤耐性菌の耐性機構の解析と予後との関連、等を掲げており、その成果を活用することで高度先進医療のさらなるサポートをめざしている。